

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル		
	論文の日本語タイトル	最近10年間における有棘細胞癌の統計的観察	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ガイドライン上での目次名称	SCC-CQ11-2	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー／メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ IV ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID	1991082526	
	雑誌名	西日本皮膚科	
	雑誌 ID		
	巻	51	
	号	4	
	ページ	785-765	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 1 ）	
	発行年月	1989	
	著者情報		氏名
筆頭著者		和田恭子	浜の町病院皮膚科
その他著者 1		和田秀敏	九州大学医学部皮膚科
その他著者 2			
その他著者 3			
その他著者 4			
その他著者 5			
その他著者 6			
その他著者 7			
その他著者 8			
その他著者 9			
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	有棘細胞癌の統計	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	九州大学医学部皮膚科外来	
	対象者	昭和 60 年までの 10 年間の有棘細胞癌の症例 94 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 1 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 12 ）	
	介入（要因曝露）		
	エンドポイント（アウトカム）	エンドポイント	区分
	1	外来患者に閉める皮膚扁平上皮癌患者の割合	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2	年齢分布	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	3	性差	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	4	初診までの期間	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	5	再発までの期間	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	6	再発に関連する因子	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	7	生存期間	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	1)有棘細胞癌の外来受診者総数に対する頻度は 0.41%であり,男女比は 1.41:1 と男に多かった.2)年齢層別では 50 歳代にピークを形成していた.3)初発から来院までの期間は 2 年以内が 77.7%であり比較的早期に受診する傾向がみられた.4)前駆病変が明らかにされた症例は 65 例で熱傷や外傷を起因とした瘢痕癌が多かった.5)部位別頻度では顔面および下肢が多かった.6) 再発は 25.5% (24/94) であり,再発までの期間は 1 年未満が最も多く,平均 2 年 2 ヶ月であった (1 年未満 : 41.6%では 2 年以内 : 58.3%と 2 年以内に半数以上が再発するが、4 年目以後も 29.9%の再発あり)。 再発率の高い前駆疾患として放射線皮膚炎,色素性乾皮症,慢性円板状エリテマトーデスがあげられた.腫瘍の大きさと再発率には相関がなく,病理組織型では分化型に比べ未分化型の再発率が高かった.7) 腫瘍死例は 9 例であった.T1N0M0 の治癒率は 100%であった.TNM 分類で病期が進行するほど,組織型で分化度が低いほど,予後が悪かった	

	結論	従来、熱傷瘢痕癌は予後不良とされてきたが、今回の研究では予後との関連は認められなかった。
	備考	
レビュワーコメント	レビュワー氏名	宇原 久
	レビュワーコメント	エビデンスのレベル分類（ IV ） 再発症例 24 例中 13 例は慢性放射線皮膚炎、瘢痕、色素性乾皮症などの SCC を発生しやすい母地を持つ疾患であり、再発ではなく新たな病巣の出現であった可能性が否定できない。因みに老人性角化症と発生母地なし、は 6 例のみである。欧米の報告に比べて、比較的長期間にわたって再発していることや、再発率が高いのは、上記のような理由によるかもしれない。ただし、本邦人症例について、再発までの期間を調査した数少ない貴重なデータである。